

の屋敷で占められていた。町人地は街道沿いや濠川（外堀）の西側に配され、とくに大和街道沿いにあたる京町通りは往来する人々で賑わっていた。現在の伏見の市街地は、この城下町の都市構造が基盤となっている。

この伏見城が廃城になり、それにかわって徳川幕府により新たに淀城が築城され、城下町が建設された。淀は、宇治川・桂川・木津川の3川が合流する付近に位置し、早くから軍事上、交通上の要衝として知られたところで、10万石余を擁する淀藩の城下町として賑わった。しかし、淀城は、慶応4年（1868）の鳥羽・伏見の戦の際に炎上し、天守台と本丸の西・南側の石垣、内堀の一部等が残るのみである。現在は、淀城跡公園として整備され、市民の憩いの場となっている。また公園の北側は明治時代に水垂より移された与杼神社（拝殿：重要文化財）の境内になっており、淀城跡と相俟って歴史的な雰囲気を醸し出している。



写真2-109 淀城跡の石垣

(イ) 高瀬川の開削による港町としての発展

江戸時代に入ると、京都の豪商・角倉了以が、慶長19年（1614）に高瀬川を開削した。これより高瀬川を通じて伏見から京都へも舟で輸送できるようになり、舟運による物流の拠点機能が高まり、港町として、そして水陸の交通の要衝にある宿場町としてさらに繁栄することとなった。この当時、淀川を伏見から大阪まで往来していたのが十石船や三十石船で、それらが舟運の中心的役割を果たしていた。

イ 伏見のまちと酒どころ

かつて伏見は「伏水」と表され、良質な地下水が豊富などころとして知られていた。現在も近郊の祭

礼行事の中心社として広く信仰を集めている御香宮神社は、平安期、境内から病気に効く香水がわき出たため清和天皇からこの名を賜ったといわれている。文禄3年（1594）から始まる秀吉による城下町の建設以降、この良質で豊富な地下水、そして舟運などの物流機能、城下町・宿場町としての発展による酒の需要の高まりなどを背景に、伏見の酒造は盛んになり、江戸初期から本格化した。天保12年（1841）に刊行された「泰平伏見御役鑑」には、明暦3年（1657）における酒造屋株の存在が記されている。

伏見の酒が飛躍的な大発展をとげたのは、明治以降である。酒の腐敗防止のため、当時はまだ珍しかったビン詰めの商品に力を入れたり、汽車を利用して東京への売り込みに努めたりするなど、数々のアイデアと努力が実を結び、全国に流通するきっかけをつくった。

伏見では今も京都を代表する銘酒が数多く造り続けられている。伏見区内の南浜、板橋、住吉を中心とする区域に多くの酒造会社が点在しており、大正時代に建造された月桂冠日本社・黄桜酒造（清酒工房）・松本酒造などの歴史的建造物では、現在もお店舗や工房として営みが受け継がれている。冬季に伏見のまちなかを歩いているとどこからともなく新酒の香りが漂う。

また、現在、伏見にある多くの蔵元が伏見酒造組合に加盟し、酒造仲間の心意気を受け継ぎながら積極的に活動しており、約400年の歴史をもつ伏見の酒造の歴史などを紹介する記念館を中心に多くの酒蔵が並んでいる。

伏見の酒は、きめの細かいおだやかでソフトな風味を特徴としている。これは主として低温長期のも

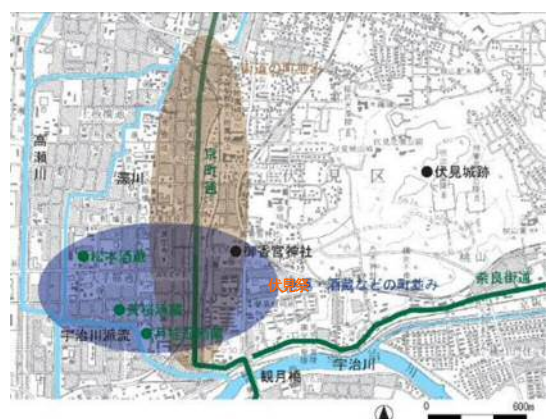


図2-65 伏見の町並み